

秋の文芸館をご案内します！



風や雲が秋を運んできてくれました。お彼岸を迎え、これで暑さもいちだんらくするでしょうか。浜松文芸館も、夏の講座が終わり秋の講座がスタートしました。まず、夏の講座の様子を報告します。本年度夏の新しい講座として、小学生を対象に開催した「読書感想文講座」を開催、定員をはるかに超える応募があり関心の高さがうかがえました。参加した小学生の皆さんは、完成した読書感想文を胸をはってそれぞれ学校へ提出できたことでしょう。



静岡大学生によるワークショップ「合作俳句～チームで挑戦 GOGO 俳句！」と「モジ文字探検隊～皆で物語を作ろう！」も大好評のうちに終わりました。合作俳句作りでは、市内3校の高校生25名が参加。できあがった俳句に思いのたけを述べあい、大いに盛り上がりました。若い感性がとらえた傑作の幾つかを紹介します。「かき氷大雨の中並び立つ」「恋落ちる宇宙の気持ち君包む」終了後、「色々な感性に触れられる良い機会になった」等、笑顔で言葉を交わす高校生の皆さん。この後、【市民文芸64】に是非応募してくれることを期待します。「川柳入門講座」でも受講者の方々の作品が新聞紙面を飾り、デビューを果たしました。「都合良く記憶なくしてする出世」「さよならのあとで振り向く人が好き」「異父姉妹母の法事で分かり合う」素晴らしいできばえです。



さて、秋の講座の代表は何といても「文学講座」「文学と歴史」でしょう。上田秋成の「春雨物語」夏目漱石の「ガラス戸の中」を学んでいます。受講者の皆さんの熱心に講師の話に耳を傾けメモをとる姿は、まるで学生時代に戻ったかのよう。幾つになっても学ぶ意欲さえあれば、学ぶことができる世の中になりました。本館の講座が、市民の皆様の生涯学習の場になれば、と考えます。こんな講座を開設してもらいたいなど、ご意見ご要望をどしどしお寄せください。

【浜松市民文芸64集】ただ今募集中！

9月1日～11月20日＊要項参照

浜松文芸館30周年記念講演会 11/10

《私と浜松》嵐山光三郎 午後2時～

クリエート浜松2Fホール 只今受付中

つれづれなるままに・・・

正岡子規の俳句に「紫陽花や昨日の誠今日の嘘」という句がある。時季外れの句ではあるが、なんだか昨今の

世相を言い得ているようで、思わず苦笑してしまった。私など、嘘もつくし心ない言葉で人の心も傷つけるし、自分の思うようにならないと怒りをぶつけまくるし、偉そうに人のことをとても言えたものではない。しかし、毎日のように取りざたされる問題には、いかんせんあきれ、会見を聞くと更に怒りはますばかり。ある人が「男として責任をとる」とか何とか言っていた。えっ、何？男としてではなく、人としてあるべき道にのっとり責任をとるべきであろう。過ちを犯してしまったら失敗したら、「私の言動が誤解を招いたとしたら」なんて言い訳たらたではなく、まずは潔く「ごめんなさい。すみません。」だろう。私たちは、親や世間からそう教わってきた。そして、失敗や過ちから学ぶことの大切さも。怒りを収め、いつも思うのは、「人のふり見て我がふり直せ」「傲慢になってはいけない」である。自分を振り返る機会にしなければ、大いに反省した次第である。

ポリドールに入社するも仕事は荷物の発送ばかり

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

松竹映画の脚本家試験にパスして喜んだのも束の間、母の猛反対にあって断念したみのるだったが、映画監督清水宏は作詞家の道をとポリドールを紹介してくれた。

母をはじめ、親戚間では悪名高き宏であったが、昭和27(1952)年11月10日の「読売新聞」夕刊に、「日本の映画監督の最高峰」と紹介されて溝口健二、小津安二郎と共に、日本映画の海外進出などについて鼎談をしている。今日この清水は溝口、小津に比べ不当にも全く忘れ去られている。あまりにも多作だったことなどが主な原因のようだ。

清水監督は実写的精神を重んじ、ストーリーやセリフ、演出を極力排除して、ありのままの「自然」を尊んだ。そのため、子供や新人、大部屋俳優、素人などを好んで使った。

代表作には、川端康成の『有りがとうさん』や坪井譲治の『風の中の子供』『子供の四季』などがある。

北海道大学卒業の履歴が詐称だと映画関係者間で取り沙汰されていたというが、浜松中学中退も創作の可能性が強い。みのると同じ明治36(1903)年の生まれだが、早生まれなのでもし浜中に入っていたらみのるの一年上級になる。とすれば、みのるが宏について何も語っていない筈はないし、どこから通学したのかをみのるの家で知らないのも変である。しかし、当時の清水宏監督の名声は、みのるのポリドール入社には大いに影響力を発揮したようだ。

「演歌夜咄」に「最初の職種が社長のボディガード。水泳部のキャプテンだったことと柔道二段が見込まれ(?)たのか、夏になると葉山に泳ぎに行く社長のお供をするわけですヨ。まァそれでも九月になればちゃんと入社出来るからと話があつてのことでしたが」とある。約束通り9月に正社員として入社できたが、配属されたのは文芸部ではなく、何と蓄音機荷造り発送部であった。初任給は50円だった。

当時のポリドールは藤田まさと、サトウ・ハチロー、佐藤惣之助といった大家がいて、僕が作詞をするなんて問題でなかった。体格はいいし力はあるし、「荷造り発送部」が適任だったのでしょ。それでも生活の足がかりはつかめた訳で、前途に光明を見出す気持ちでしたヨ

朝荷物を送り出すまでは忙しいが、その後は結構時間がとれ、物置に行つては詩の本をあれこれ読んで、どうしたら流行歌が書けるか一生懸命勉強したという。

翌7年の春、朝日新聞に明治キャラメルCMソング募集の記事が掲載されたのを見て、即座に応募したところ、4万3千編の応募作品の中から、みのるの「僕は天下の人気者」がただ1点一等に入選、250円の賞金を獲得した。

秋になり今度は、日本最初の国産飛行機「全日本号」の完成を記念して同じく朝日新聞社が、童謡の募集をおこなった。それにも入選したので、これで社長も認めてくれるだろうと期待をしたが、一向に声がかからない。何度もやめようと思ったものの、今に芽がふくだろうと自分に言い聞かせてじっと我慢しつづけた。運命の分岐点が訪れるのは、それから7年待たねばならなかった。